提出締め切り: 帰国後１ヶ月以内　　提出先: shien@asafas.kyoto-u.ac.jp

京都大学大学院　アジア・アフリカ地域研究研究科
フィールドワーク・インターンシッププログラム 2011 年度　JASSO 派遣報告書

報告者氏名　　薄　さやか　　22　年度（入学・編入）

1.研究課題：

記憶の場としての公文書館

―仏植民地期カンボジアの公文書管理にみるアーカイブズの政治性―

2.派遣期間：

平成 23 年 11 月 1 日　～　平成 24 年 1 月 28 日　（　90 日間　）

3.今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください

本研究は「何を公的な史資料とするか」という文書館の政治性に着目し、公文書管理の実態から仏領期カンボジアの国家の特質を問うものである。派遣先での仏領期行政史料（理事長官文書、以下 RSC）の閲覧・収集、および帰国後の分析をとおし、①当時のカンボジアにおける公文書管理について、インドシナ総督府やフランス植民地省が介入していたこと、②国家のみならず地方レベルでの文書管理状況を把握すべく、インドシナ総督府による一斉調査が行なわれ、その回答文書が存在していたこと（RSC No.11356）、③理事長官文書の人事記録から、公的記録を管理するアーキビスト職に、カンボジア人ではなくベトナム人などが採用されていたこと（RSC No.7500）などが明らかとなった。とりわけ②の文書には各地方政府の分類目録などが細かに記されており、地方における「公的記憶」の創出を分析する際の、有力な手掛かりになりうるだろうと考える。

4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や展望について

派遣期間中の公文書館通いをとおし、あらためて生の史資料に触れることの大切さを痛感した。もちろん派遣前には準備作業として、先行研究分析、国内で閲覧可能な官報や関連法令情報の収集、理事長官文書目録の作成やタイトル分析などを行なってきたが、実際の文書は目録のファイルタイトルからは予想できないものが納まっていることが多く、自らの手で一点一点確認・分析することの重要性を実感したからである。また今回調査を行なったカンボジア公文書館には、主に仏領期の現地文書が保管されているが、現地（カンボジア理事長官府）とフランス本国（植民地省）間の行政文書については、南仏エクサン・プロバンスの海外公文書館（Centre des Archives d'Outre-Mer）に保管されている。そのため、今後もカンボジア公文書館に通い一次資料を調査するとともに、フランスの海外公文書館でも機会があれば調査を行ない、仏領期公文書管理の実態を多角的に分析していきたいと考えている。

5. 本プログラムに関して意見をお聞かせください。また、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいですか？

一度社会人を経験してから再度大学院に入学した者にとって、このような年齢制限のないプログラムは大変に有難い。今後も自己の研究と合致するプログラムがあれば、積極的に参加したい。

署名